

という方にこそお勧めしたい……

のエントランスモデル

シルキー B♭ トランペット 「i 32 / i 33」

明るく輝かしい音色で日本にも多くのファンを持つシルキー・トランペットの新しいベストセラーモデルとなったのが、ユーザー層のターゲットを拡げて開発された innovation シリーズ。その魅力を語る。

記事協賛：株式会社 グローバル

——シルキーと言えば S 32、S 22 がオーケストラや吹奏楽を中心に長く人気を得て来ましたが、その後、よりしっかりと響きを持つ H D シリーズが開発され、さらにシルキー初となるスタンダードタイプのマウスパイプ（従来はリバースタイプ）を持つソロイストシリーズが登場して、日本のオーケストラ奏者に一気に浸透を見せ始めました。こうした流れの中でもう一つ注目されるのが、数年前に登場した「i」シリーズ（イノベーションシリーズ／B♭管のみ）です。シルキーのラインナップでは最も求めやすい価格で登場しただけでなく、S シリーズから H D シリーズまでの様々なノウハウが投入されたハイブリッドな魅力を持つモデルでもあります。i シリーズ開発の経緯をまずは教えていただけませんか。

高橋 もとは、僕と田中君（読売日本交響楽団・田中敏雄氏）が監修してグローバルとシルキーが共同開発した H D シリーズの C 管（C 3 H D）からスタートしているんです。少し遅れて B♭ 管（S 33 H D、S 23 H D）も出ましたが、H D シリーズはどちらかと言うとプロフェッショナルタイプのシリーズとして開発された。だとしたら、これと似たもので、もう少しユーザーの間口が広いスタンダードなモデルがあってもいいんじゃないか、ということとで新しく作られたのが i シリーズです。



最初に出来たのが i 32 というモデル。

シルキーの伝統的な「2番」という、大きなベルテーパーを持って誕生しました。でも日本人は西洋人に比べて小柄ですし、最近では女性も多いので、より鳴らしやすく、音がまとめやすいものの方が良いだろうということで、サイズを一つ落とした「3番」ベルテーパーのモデルを日本側から提案し、少し遅れて i 33 が加わりました。

倉林（グローバル担当者） それまでのシルキーは、ベストセラーだった B 5 や S 32、S 22 のベルテーパーは2番が採用されていました。i シリーズもその伝統的な流れから、最初は2番ベルテーパーを持つ i 32 が出来上がりました。

高橋 2番ベルは B♭ 用のベルとしてもシルキーでは一番標準的だったんです

革新的な
ニューモデル！

“innovation” B♭ Trumpet

i 32 SP……………¥ 400,000（税抜）
ボア：ML（11.68mm）ベル：ML（124mm）

i 33 SP……………¥ 400,000（税抜）
ボア：ML（11.68mm）ベル：M（124mm）

※いずれもシルバープレートのみ

ね。でも、僕らが監修した H D やソロイストは B♭ 管も C 管も3番なんです。シルキー本社で様々なベルを試しましたけど、3番のサイズ感、音色感が我々にはちょうど良かった。実際、オーケストラや吹奏楽などでいろんな色彩感を出そうと思うと、2番だと少し大きすぎる感じがします。だから i シリーズでも3番を提案したんです。

——i シリーズのベル径（124mm）は H D シリーズ同様にシルキーの伝統的なベル径（127mm）よりも小さめにしていますね。

●対談

高橋 敦

Osamu Takahashi

◎東京都交響楽団首席トランペット奏者

川田 修一

Shuichi Kawata

◎東京フィルハーモニー交響楽団首席トランペット奏者

シルキーは初めて Schilke



高橋 敦

富山県生まれ。洗足学園音楽大学を経て洗足学園音楽大学卒業。トランペットを津堅直弘、関山幸弘、佛坂咲千生の各氏に師事。第65回日本音楽コンクール1位、第13回日本管打楽器コンクール1位。新星日本交響楽団（現東京フィル）を経て1999年に東京都交響楽団首席。宮崎国際音楽祭、霧島国際音楽祭、セイジ・オザワ松本フェスティバルなどへ定期的に参加。ソリストとして国内外のオーケストラや吹奏楽団と共演。ミュンヘンARD国際音楽コンクールの審査員も務める。洗足学園音楽大学客員教授、東京音楽大学講師。

川田修一

1984年福島県出身。国立音楽大学を首席で卒業し矢田部賞受賞。藝大フィルハーモニア管弦楽団首席を経て2017年に東京フィルハーモニー交響楽団首席となる。第78回、第81回日本音楽コンクール入選、第25回日本管打楽器コンクール3位。第49回独マルクノイキルヒェン国際コンクールディプロマ賞。2015年文化庁海外研修生として独カールスルーエ音大に学ぶ。トランペットを北村源三、熊谷仁士、山本英助、野口浩史、ラインホルト・フリードリヒの各氏に師事。LeDueTrombe、金管合奏団「宴」、Brass Ensemble Zero Tokyoメンバー。



▲ i32 / i33 のレシーバー。Sシリーズより細身になり、先端だけ厚くしてバランスをとっている。



▲ i32 / i33 のバルブケーシング。上部が樽型に膨らんだエルゴノミックな形状で持ちやすく設計されている。バルブをつなぐパーツが他のモデルよりも小さく、2番管のカニ目は1個のみにするなど、より吹きやすい吹奏感が得られる設計が施されている。

◀ ベルには新しいロゴデザインが輝く。彫刻はレーザー彫り。

倉林 ケーシングの上部が樽型に膨らんでいるのも独特ですね。持ちやすくすることに加え、響きも考えて設計されています。他に、2番管のカニ目を2個から1個に減らしたり、バルブのつなぎパイプを小さくしたりして抵抗感のバランスをとっています。Sシリーズよりコストダウンを実現しているわけですが、パーツに安い材料を使ったとかでは決してありません。シルキーはもとよりフリーハンドで丁寧に楽器を作っているメーカーで、従業員は30名ほどです。その中で

高橋 見た目でまず違うのは、レシーバーですね。iシリーズのレシーバーはSシリーズよりも全体的に細身で、そのぶん先を太くして抵抗を作っています。この形は先代のシルキーさんが元々デザインしていたものだそうで、今回復元したと聞きました。

——iシリーズはSシリーズの流れを受け継ぎますが、SシリーズのBb管と仕様面でどのような違いがあるのですか？

倉林 はい、HDシリーズのコンセプト（よりしつかりと、まとめやすく等）のもと設計されたベル径（124mm）は、iシリーズのコンセプト（より吹きやすく、扱いやすく等）にも良い効果が得られたので採用されました。ただし、ベルの製作方法はHDシリーズに採用されている「一枚取り」ではなく、iシリーズはつなぎ目のないシルキーの伝統的な「シームレス」が採用されており、様々なノウハウを「いいところ取り」したハイブリッドなモデルになっています。

川田 i32は、より「歌うように」吹ける楽器です。自分の声そのまま伝わるような感じ。i33は、もう少しコンパクトになり、例えばオスカ・ベメなどはi32の方がいいけれど、ハイドンなどはi33の方がよりスタイリッシュに吹けるというイメージを持ちました。息の入りやすさは、やはりi32の方が入りやすく感じます。抜けが良いぶん、長時間吹くと疲れやすくなりますから、そんなときはi33の方が、疲れていても楽器が助けてくれる印象があります。ビッグバンドなど

楽器を最終的に組み立てる人は2人しかいないんですね。それだけに時間もかかり、コストが高めになるわけですが、iシリーズでは他の有名メーカーと同じように専用の治具を使用することで手作業を減らし、そのコストを削減しています。シルキーの良さをこれまで以上に多くの人に知ってもらおうと、より求めやすく、より吹きやすい楽器を開発した、というのがiシリーズのコンセプトです。

——川田さんはiシリーズにどんな感想を持たれましたか。

川田 i32は、より「歌うように」吹ける楽器です。自分の声そのまま伝わるような感じ。i33は、もう少しコンパクトになり、例えばオスカ・ベメなどはi32の方がいいけれど、ハイドンなどはi33の方がよりスタイリッシュに吹けるというイメージを持ちました。息の入りやすさは、やはりi32の方が入りやすく感じます。抜けが良いぶん、長時間吹くと疲れやすくなりますから、そんなときはi33の方が、疲れていても楽器が助けてくれる印象があります。ビッグバンドなど

◀ ザ・シルキー・ファイブでも一緒にアンサンブルを組む両氏。



をやる方は大きめなベルテーパーの i 32の方を好むんじゃないかな。
高橋 ジャズの人たちににより大きなベルテーパーの B1 や X3 などが好まれるのは、マウスピースが小さいぶん、響きのバランスをつくるためもあると思います。

——i シリーズのほかの特徴は？

川田 上から下までムラなく、とにかく滑らかに吹けます。リップスラーできれいに音が並びますし、トランペットの特性上、当たりにくい音がとても当たりやすい。普段トランペットを吹くときに吹きずらさを感じていてうまく操れてないなあと思っている人の方が、たぶんこうした良さは余計感じられると思います。

——リバースタイプを吹いたことがない人もいると思いますが、息の抜けなどについてはどうですか？

高橋 リバースタイプのようにマウスバンプが長いと、それが抵抗として通常よりもきつく感じる人がいるかも知れませんが、でも、息をしつかりと出していれば、リバースタイプの方が吹きやすいはずなんです。本来、息を通りやすくするためにそうしているわけですからね。

川田 僕はいまソロイストシリーズ（マウスバンプはスタンダードタイプ）を使っていますが、S 22（リバースタイプ）も持っていて、ミュージカルなどで使ったりすることがある。よりスピード感のある響きがミュージカルなどにマッチする感じがして。

高橋 反応の良さはシルキーさんがともと目指していたものですね。だからリバーで作り続けてきた。これは想像ですが、シルキーさんが創業される以前の世の中の楽器は、きつと今よ

りずつと反応が悪かったんだと思いますよ。音程も悪く吹きムラもあるみたいなの。シルキーさんはシカゴ交響楽団でハーセスさんと並んで吹きながら、そうしたことを改善しようとしたんでしょね。

シルキーの真の魅力は……

高橋 先ほど川田君が言った「ムラがない」というのは、楽器にとってはとても大事なことなんです。ムラがあると息の入れ方を音によって変えないといけなくなる。シルキーはその点、自分で思い描いたものがそのまま音になり、歌うように吹ける。それがシルキーの良さなんです。

川田 音楽に集中できますよね。

高橋 吹きやすい楽器というのは、そういうことだと思います。

——作りの良さも大事ですね。

高橋 シルキーのバルブの切れの良さは本当に凄いですよ。止まったことなんて一度もない。シルキーの前の楽器は本番中に何度も止まり、「押し方が悪い」なんて言われたりしましたけど（笑）。オイル

を差した時に限って止まるんですよ（笑）。シルキーは細部の作りも本当にきれいですね。

川田 世の中にはハンダが取れちゃったりする楽器もある（笑）。

高橋 シルキーはハンダの量がすごく計算されているんですよ。無駄に多めには付けない。それも反応の良さと吹きやすさにつながっていると思います。

川田 この年末から正月にかけてジルヴェスターコンサートや NHK のニューイヤーパーラ、あと紅白にも出たんですが、それらの仕事をもろに全部シルキーでこなしたら、きついスケジュールだったにもかかわらず仕事がすごく楽しくて、しかも録音を聴くと音が非常によく乗って聞こえる。「やったあー」という感じがしたね。マイク乗りがよく、自分もハッピー、同業者の人からも「すごく良かった！」と言ってもらえましたから。

高橋 先日、僕の生徒が C 管が欲しいというので様々な楽器を試奏したんですが、結局シルキーの C 3 HD を購入しました。

川田 僕の生徒も音大受験前にソロイストの B♭ 管（S B4-O-T）を購入し、それまで沈んでいた音がガラッと良くなって、めでたく受験に合格しました。練習を横で聴いていた親御さんが「音が全然変わった！」と言って喜んで下さったのが印象的でした。

高橋 先入観なく吹いたら、多分、ほとんどの人がシルキーの方が吹きやすいと思うってくれると思います。

ザ・シルキー・ファイブ コンサートツアー 2021 [第2弾]

鹿児島公演

3/30 (火) 19:00
かごしま県民交流センター・中ホール
料金：一般 ¥3000 学生 ¥1500
ピアノ：野田清隆

福岡公演

4/1 (木) 19:00
あいれふホール（福岡市中央区）
料金：一般 ¥3000 学生 ¥1500
ピアノ：野田清隆

岡山公演

4/2 (金) 19:00
岡山県立美術館ホール
料金：一般 ¥3000 学生 ¥1500
ピアノ：野田清隆

東京公演

4/5 (月) 19:00
渋谷区文化総合センター大和田・さくらホール
料金：一般 ¥3500 学生 ¥2000
ピアノ：野田清隆

曲目：J パーンズ（交響的序曲）パッフェルベル（カノン）ヴェルディ（歌劇「運命の力」序曲）ビゼー（歌劇「カルメン」より「恋は野の鳥」）ボロディン（歌劇「イーゴリ公」より「ダッタン人の踊り」）他

※第2弾ツアーの4公演は松山萌に代わって伊藤駿（東京都交響楽団）が出演。

問：（株）グローバル企画営業部
concert@global-inst.co.jp 03-5389-5111

